説教20211205イザヤ11:1-10マタイ3:1-12「わたしの後から」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

洗礼とは、教会のサクラメントの一つで、言うまでもなく最も重要な出来事です。私たちは洗礼を受けて神の民となり、教会のメンバーになるわけですが、では、その洗礼の中身は一体何？と聞かれて、すんなりと答えられる方は幸いです。かくいう私も洗礼って一体何？と聞かれて完璧にお答えする自信はありません。そもそも洗礼とは人間にははかり知ることが出来ない神様の秘儀（秘密の儀式）ですので、完璧に答えられない方が当たり前なのかも知れません。

それでも洗礼について一定の理解をしておくことはとても大事なことでしょう。なぜならば洗礼と言うことが、人間にとって大事なことであるがゆえに、人間によって勝手な解釈や意味づけが行われてしまう危険性が一方にはあるからです。例えば今や、洗礼と言うキリストの言葉は、世間で一般的に用いられる言葉になりました。例えば次のような歴史的記述があります。「広島が、空襲の最初の洗礼を受けたのは、昭和二十年三月十八日であった。」又、次のような個人的ながあります。「自分の顔が青ざめていくのが、はっきりと分かった。こうして山本（浩二）さんの洗礼を受けた形で、僕のプロとしての勝負は始まった。それから後も、プロの厳しさを身にしみて味わった。江川」このように洗礼と言うことが各々の人にとって画期的な出来事として語られるのはわかりますが、それが全くキリストを離れて語られるというのは非常に問題なのであります。

そこで、洗礼について理解しておきたいと思う方には、今日のマタイ福音書の箇所がうってつけだと思います。この箇所は、このアドベントのシーズンには毎年のように読まれる箇所ですので、教会もこの箇所を何度も何度も繰り返し読むようにしているのでしょう。この箇所には、洗礼の基本的な事柄である「悔い改め、罪の告白、善い実と悪い行い、水による清め、火に焼かれる試練、聖霊、そしてイエスキリスト」が語られており、私たちはこの箇所を黙想することによって洗礼とはどんなものかを理解し、又それを人に勧めることが出来るようになるでしょう。

そして今日は、数多い洗礼の事柄の中から、それが歴史的出来事であること、そして個人的出来事であること、そして大いなる喜びであることの３つを中心に語って参りたいと思います。

洗礼とは、歴史的な出来事です。聖書の中で、このマタイ福音書３章１節に至るまで、洗礼と言う言葉は一回も出てきません。神の民は将に旧約と新約が橋渡しされるこの時を迎えて、多くの者たちがこぞってヨルダン川に赴いて次々に洗礼を受け始めたのです。洗礼とは歴史的出来事ですから、今日の日本でのようにいくら牧師が四苦八苦しても教会員が一向に増えていかないという時代も確かにあるのです。だから牧師は何もしなくてよい、或いは何もできないというのではありません。牧師も又歴史的な存在として、前の世代からサクラメントを受け継ぎ又、それを後に続く者に受け渡していくという歴史的役割を担っているのです。たとえてみれば、牧師と言うのは教会の個人事業主なのではなくて、最後の時まで続く教会のひと時を担っている一コマのようなものでありましょう。ですから牧師は、努めて、周囲の牧師と協力をし、教会の継承と言う歴史的役割を積極的に果たしていかなければなりません。大きく言いますと、今ここで説教している私は、洗礼者ヨハネと協力しながら伝道の業を行っていると言っても差し支えないでしょう。

次に洗礼は個人的な出来事であります。クリスチャンは必ず、何年何月何日になになに教会でだれそれ牧師から洗礼を受けたと申し述べることが出来ます。それはまさに聖霊によって新しい個人が生まれることであり、その受洗の日は、赤ちゃんが肉をとってこの世にオギャーと生まれる誕生日と較べることもできるでしょう。

この様に歴史的個人的出来事である洗礼ですが、では、それが大いなる喜びであるというのはどういうことなのでしょう。それは、ルカによる福音書15章 7節に書いてあります。

「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」これですね。

悔い改める一人の罪人とは、悔い改めて洗礼を受けた私たち一人一人のことです。つまり私たちが洗礼を受けた時、天の国の全ての人たちが大いに喜んでくれたのであります。自分の洗礼の時を思い起こしてください。その時、親族の人たち全員があなたの洗礼を喜んだわけではないかも知れません、中には喜ぶどころか受洗に反対をする親族の方も居られたのかも知れません。しかし、その洗礼式の時に、教会の中に集まった全員は、何とも言えない聖霊の祝福を受けて、全員が喜んだのではないでしょうか。このように、洗礼の喜びというのは、血がつながっているいないという親族の枠を超えて、全ての人へと広がっていくものなのです。その天の国の大いなる喜びの様子が今日のイザヤ書の箇所に記されています。１１章６節～「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。」

いかがでしょうか、オオカミもヒョウも子ヤギも子羊も子牛も若じしも乳飲み子も幼子も毒蛇もマムシも、天の国ではみんな隣人として和気あいあいと暮らしているさまが記されています。えーそんなことあるんだろうかと、とても信じられないと思う方も居られるでしょうが、人間には信じられないような奇跡を成し遂げられるのが主なる神なのであります。そして天の国での隣人の一人となる私たちも、洗礼を受けるというはじめの第一歩をしるしたことによって、この天の国への道を確かに歩み始めたの在ります。その一歩一歩も主なる神の奇跡の御業に他ならないでしょう。

さて今まで、洗礼とは、歴史的出来事であること、そして個人的出来事であること、そして大いなる喜びであることの３つを中心に語って参りましたが、では洗礼者ヨハネが現れた時の洗礼の様子を具体的に見て参りたいと思います。

この洗礼者ヨハネが登場した時代と言うのは、主イエスが地上での歩みを始められるという画期的な時代に当たります。「そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」変革の時代には、人の思いや行いも変えられるもので、エルサレムとユダヤ全土の人々はこぞって、ヨルダン川と言う荒れ野で暮らす、ヨハネと言う者のもとにやってきて彼から洗礼を受けたのでした。ヨハネがやっていたことはただ「悔い改めよ。天の国は近づいた」という御言葉を述べ伝えていただけでした。それでも多くの人がその御言葉一つで彼の所に集まって、彼から洗礼を受けたのでした。その頃の社会情勢と言うのはよほど過酷で絶望的であったのかもしれません。この僻地にいるヨハネのもとに集まったのは民衆ばかりではありませんでした。ファイサイ派やサドカイ派など、神殿を中心として当時の社会の中枢にいて社会を担っていたとされる彼らの中からも大勢の人々が集まったと、記されています。彼らが、ヨハネから洗礼を受けようとした動機は具体的には記されていませんので確かなことは言えませんが、それでも、ヨハネの洗礼には当時の社会の中枢を揺さぶるようなインパクトがあったのは間違いないことでしょう。彼らは皆、悔い改めて、自らの罪を告白したいという思いがあったのでしょう。そしてそれをエルサレムの立派な神殿でするのではなく、ヨルダン川の中でヨハネという人物の手から洗礼を受けることによって、果たしたいというところに洗礼の始まりが顕されています。そしてこの洗礼の形は、今の教会での洗礼式にそのまま受け継がれています。

ところで私たちが洗礼を受けて、聖霊を受けてキリストの者とされるという意味においては、誰から洗礼を受けようが変わりはないのですが、牧師も又一個の人間でありますのでそれぞれに個性や特徴があります。この洗礼者ヨハネの個性は、次のようであったと言います。「常に真理を語り、恐れなく悪を責め、真理のためには苦しみをしのぶ」という性格であったようです。「恐れなく悪を責め」るヨハネの真骨頂が７節からに記されています。「ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。」

私も洗礼を受けに来た人にこのように大胆に率直に語ってみたいものですが、なかなかそうはいきませんね。このヨハネの言葉は、ファリサイ派やサドカイ派の人々の胸に突き刺さりました。なぜならば、彼らは実際に『我々の父はアブラハムだ』などと言って、自分の御先祖を誇っていたからです。わかりやすく言えば彼らはご先祖様崇拝におちいっていたのでした。ファリサイ派やサドカイ派の人々が悔い改められない理由の一つはこの御先祖様崇拝にありました。彼らは時代をさかのぼったところにいるアブラハムの偉大さに目を向け、それを自分たちの誇りとしたのでした。しかし「私はアブラハムの子孫である」と言って自らを誇ったとしても何の足しになるでしょうか。それは意味がない尊大さを自らにもたらすだけなのです。ヨハネはそんな無意味さを善い実を結ばない木に例えて次のように言います「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」そして麦に例えて次のように言います。「麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」なんとも歯に衣を着せぬ発言でありますが、私たちはこんな風にバッサリ切られてしまうとかえってすがすがしさをも感じてしまうのではないでしょうか。そしてそれにはヨハネ自身の性格や心がけもかかわっています。ヨハネは決して尊大なものではなくむしろ非常に謙遜な者でありました。

3章 11節

わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

ヨハネは自分が施している洗礼の業も、完全なものとはみなさず、それを完成して下さる後からくる方、すなわちイエスキリストを待ち望んでいるのです。

私の後から来る方、エッサイの株から萌え出でる若枝である、主イエスキリストこそ私たちが誠に誇るべき方であります。私たちは洗礼を受けてイエスキリストの者とされている喜びを今ここで感じながら、彼が来られる時を待ち望んでまいりましょう。

お祈りいたします

憐み深い全能なる父なる神よ

あなたは、私たちを完全なる悔い改めへと導き、背負っている罪から解放されるために、洗礼という儀式を与えて下さいました。どうか洗礼を受けた私たちが、受けた聖霊に導かれて、すがすがしく善い行いに励み、ひたすらキリストの道を歩むことが出来るようにしてください。

また、全ての人に洗礼を施しなさいというキリストの御言葉に従って、献身していくことが出来ますように。

アドベントを歩む私たちの１歩１歩をお守りください。たとえ大きな暗闇の中を歩む時も、御子の光に照らされて、十字架の次にある御国へと近づいていくことが出来ますように。

私たちが御子を待ち望む心を一つにして、今、会えないでいる方々にも讃美の歌声を響かせていくことが出来ますように。

父と聖霊と